2026年度 第7回（12月）北辰テスト対策 予想問題　解答・解説

国語

1　問1（4点）

ウ

蓮は「断る言葉は、家を出る前から何度も頭の中で練習してきた」。それでも、祖父が長年大切にしてきた笛を目にすると、断ることがためらわれ、言葉が固まってしまった。

・ア 断る言葉は前から練習してきており、理由が思いつかないわけではない
・イ 腹を立てている描写はない
・ウ 用意してきた言葉があるのに、笛を前にして言えなくなっている→正答
・エ 蓮は祖父の手もとの笛を見つめており、興味を失ってはいない

採点ポイント:「用意してきた言葉」と「喉の奥で固まってしまった」の対比から、ためらいを読み取れているか。

1　問2（4点）

エ

祖父は「おしまいになるもんは、おしまいになる」とあっさり笑ってみせた。しかし「けれど」のあと、手は同じ場所を何度もなでている。言葉や表情とは別に、笛が受け継がれなくなることへの未練やさびしさがあることが、手の動きに表れている。

・ア 汚れが落ちないという描写はない
・イ 手の動きからは安心していると読めない
・ウ 蓮を責める言葉や様子は書かれていない
・エ 「あっさりと言って笑った」ことと、「けれど」以降の手の動きの食い違いから読み取れる→正答

採点ポイント:「けれど」で前の祖父の様子とあとの手の動きが対比されていることに気づけているか。

1　問3（6点）

(例) 笛のくぼみが、何代もの人が受け継いで吹いてきた長い年月を物語っている

正答例:

・(例1) 笛のくぼみが、何代もの人が受け継いで吹いてきた長い年月を物語っている（34字）
・(例2) くぼみから、笛が代々受け継がれてきた年月の長さを感じとった（29字）

根拠: 祖父は、笛を「おれが十四のときに、じいさんから受け継いだ」と言い、「穴のまわりが、すり減っとるだろう」と指で示す。笛のくぼみは、何代もの人が長い間吹き続けてきた跡であり、蓮は、そこに指を置いて、その年月の長さと、吹いてきた人々の思いを感じとった。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「受け継ぐ」（受け継いで・受け継がれて等）が使えている	1点	指定語必須
②「くぼみ」が使えている	1点	指定語必須
③ 何代もの人が（代々）という、人から人への継承の内容が示されている	1点	「代々」「何代もの人が」等
④ 吹き続けてきた（長い）年月という内容が示されている	2点	「長い年月」「年月の長さ」等
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

1　問4（4点）

イ

祖父は「へたくそだな」と照れかくしのように言ったあと、「だがな」と話を転じて、「息がまっすぐだ」と蓮のよいところを具体的に述べている。祖父は、笛に触れた蓮をそっと認め、励まそうとしている。

・ア からかいだけでなく、よい点を認める言葉が続いている
・イ 「だがな」のあとで蓮の長所を述べ、後押ししている→正答
・ウ 後悔している様子はなく、むしろ目を細めている
・エ 蓮はまだ「継がない」とは言っていない。祖父は継ぐことを無理に求めていない

採点ポイント: 「へたくそだな」と「だがな」以降の言葉を比べ、祖父の本心がどちらにあるかを読み取れているか。

1　問5（5点）

ア

祖父は、蓮の「教えてくれる？」に言葉で答えず、丸めていた背を伸ばした。これは祖父の喜びと張り合いが戻ったことを表している。また「笛の音の余韻のように」という比喩で、二人の間に生まれたあたたかな静けさが印象づけられる。

・ア 動作と情景の両方から、祖父の静かな喜びと余韻を読み取っている→正答
・イ いらだちを示す描写はない
・ウ 痛みに耐える様子は、結びの二文にはない
・エ 蓮は部屋にいて、窓の外を見たあとに頼みを口にしている

採点ポイント: 「返事のかわりに」の動作と、「笛の音の余韻のように」という比喩の二つを結びつけて読めているか。

1　問6（5点）

ア・オ

・ア: 蓮は最後に「教えてくれる？」と自分から頼んでおり、拒みつづけてはいない→不適切→正答
・イ: 言葉と手の動きの食い違いから、祖父の本心が読み取れる→適切
・ウ: 黒ずみやくぼみは、何十年もの年月を感じさせる→適切
・エ: 短いかけあいに、親しみが表れている→適切
・オ: 結びには、祖父が背を伸ばし、虫の声が続く場面があり、腹を立てた様子はない→不適切→正答

採点ポイント: ア・オの2つを両方選んで正答（5点）。過不足があれば0点（部分点なし）。

2　問1(1)（2点）

しっせき

叱責＝失敗やまちがいを、きびしくとがめること。

採点ポイント: 「しっせき」。「しせき」「しっしゃく」などと誤らないこと。「叱」は「しか（る）」、「責」は「セキ」と読む。

2　問1(2)（2点）

だき

唾棄＝つばを吐き捨てるほど、ひどく軽蔑し、嫌うこと。

採点ポイント: 「だき」。「唾」は「ダ」（「つば」とも読む）、「棄」は「キ」と読む。「すいき」「たいき」などと誤らないこと。

2　問1(3)（2点）

ととう

徒党＝何かをするために集まった仲間。多くは、よくない目的のための集まりをさす。
採点ポイント:「ととう」。「ただとう」「とどう」と誤らないこと。「徒」は「ト」、「党」は「トウ」と読む。

2　問1(4)（2点）

収益

収益＝事業などによって得られる利益。
採点ポイント:「収益」。「収」の右側（のぶん）の形と、「益」の上の部分を正しく書く。「収集」などの別の語と取り違えないこと。

2　問1(5)（2点）

台頭

台頭＝新しい勢力が力をつけ、前に出てくること。
採点ポイント:「台頭」。「頭」を「豆」の部分から正しく書く。「台」を「合」などと書き誤らないこと。

2　問1(6)（2点）

勤

勤める＝会社や役所などに雇われて、仕事をする。送りがなは「める」。ほかに「務める（役目を果たす)」「努める（努力する)」があり、使い分けに注意する。
採点ポイント:「勤」。「銀行に雇われて働く」意味なので「勤」。「努」「務」と書き誤らないこと。

2　問2（2点）

イ

「気が置けない」＝気をつかう必要がなく、うちとけて付き合えること。「気を置く」（遠慮して気をつかう）を打ち消した形。「油断できない」という意味で使うのは誤り。
・ア よくある誤用。「気が許せない」と取り違えている
・イ 「小学生のころからの友人」とあり、気楽に付き合える間柄→正答
・ウ 気配りが足りないという意味ではない
・エ 落ち着かないという意味ではない
採点ポイント:「気が置けない」を「油断できない」と取り違えず、「気づかいがいらない」と読めているか。

2　問3（3点）

エ

「石橋をたたいて渡る」＝丈夫な石の橋でも、たたいて安全を確かめてから渡ることから、用心の上にも用心して、慎重に物事を行うこと。
・ア 幸運は焦らず待つのがよい
・イ 出歩くと思いがけない幸運や災難にあう
・ウ 手遅れで、今さら何をしても意味がない
・エ 何度も確かめ、別の経路まで調べる慎重さにあてはまる→正答
採点ポイント:「何度も確かめた」「別の経路まで調べた」という慎重な行動を、ことわざの意味と結びつけられているか。

2　問4（3点）

ア

「鬼に金棒」＝ただでさえ強い鬼に金棒を持たせると、さらに強くなることから、強い者がさらに強さを加えること。

・ア 守りの堅いチームに、すぐれた攻撃力が加わった→正答
・イ 不運の上に、さらに不運が重なること
・ウ くらべものにならないほど、二つのものに差があること
・エ 中途半端で、役に立たないこと

採点ポイント:「もともと守りが堅い」うえに「攻撃力が加わった」という、強さが重なる状況を読み取れているか。

2　問5（3点）

イ

「背に腹はかえられぬ」＝大切な腹（体の中心）を守るためには、背中を犠牲にしてもしかたがない、ということから、差し迫った大きな問題の前では、ほかのものを犠牲にするのもやむをえないこと。

・ア 「花より団子」の反対にあたる内容で、このことわざではない
・イ 大きな問題のために、ほかを犠牲にしてもやむをえない→正答
・ウ ことわざの意味ではない
・エ 「急がば回れ」に近い意味で、このことわざではない

採点ポイント:「背」と「腹」を比べ、「腹（大切なもの）のためには背を犠牲にする」という構図を、意味に結びつけられているか。

2　問6（3点）

ウ

我田引水＝自分の田にだけ水を引くことから、自分に都合のよいように言ったり、したりすること。

・ア 自画自賛＝自分で自分のことをほめること
・イ 付和雷同＝自分の考えがなく、他人の意見にすぐ同調すること
・ウ 自分の地区だけが得をする案を主張し、ほかの事情を考えない→正答
・エ 一刀両断＝ためらわずに、思い切って物事を決めること

採点ポイント:「自分の家の前の道ばかり」「ほかの地区の事情には耳を貸さなかった」という、自分に都合のよい主張を読み取れているか。

2　問7（2点）

ウ

司会は、山田さんの「当番制」という案と、中村さんの「来られない人が出る」という課題を受けとめ、整理している。空欄のあとの「来られない日の代わりの人の決め方も含めて」へ自然につながるのはウ。

・ア 二人とも、水やりをやめるとは言っていない
・イ 中村さんは、特定の人を外す提案はしていない
・ウ 案と課題の両方を整理し、あとの発言とつながる→正答
・エ 「もう少し案を出し合いましょう」とあり、決まってはいない

採点ポイント: 空欄の前後の流れから、司会の役割（二つの意見の整理）を読み取れているか。

3　問1（4点）

イ

前の文で、人が手を触れない自然を守る考え方を述べたあと、「だが」を境に、①で「手を触れないのがいちばんよいとは限らない」と反対の考えを示している。そのあと、第2段落が「その例が、里山である」と具体例につなげている。

・ア 前の内容と反対の考えを述べている
・イ 「だが」で前の内容と反対の考えを示し、「その例が、里山である」につながる→正答
・ウ ここから里山の話題が始まる
・エ ①の内容と反対

採点ポイント: 「だが」という逆接と、次の段落の「その例が」という書き出しを手がかりに、文の働きを読み取れているか。

3　問2（4点）

ウ

「そうして」は、直前の文「里山の林では、人々が定期的に木を切り、下草を刈ってきた」を指している。木を切り、下草を刈るから、林に日光が差しこむ。

・ア 手入れをしなくなったという内容は、第3段落に出てくる
・イ 日光が届いた結果として起こることで、「そうして」の指す内容ではない
・ウ 直前の文の内容→正答
・エ 第3段落の内容で、②より後に出てくる

採点ポイント: 指示語は、直前の文から指す内容を探し、「そうして」を実際に入れて読み返せているか。

3　問3（6点）

(例) 燃料が変わって手入れをする人がいなくなり、林が茂って暗くなった

正答例:

・(例1) 燃料が変わって手入れをする人がいなくなり、林が茂って暗くなった（31字）
・(例2) 燃料の変化で人が林に入らなくなり、手入れされず暗くなった（28字）

根拠: 第3段落に、「燃料が薪から電気やガスに変わり、人々が林に入らなくなると、木は茂り放題になり、林の中は暗くなった」とある。燃料が変わって林に手が入らなくなり、林が暗くなったので、日光を好む草花と、それに頼る昆虫がいられなくなった。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「燃料」が使えている	1点	指定語必須
②「手入れ」（手入れする・手入れされ等）が使えている	1点	指定語必須
③ 燃料が変わって、人が林に入らなくなった（手入れをする人がいなくなった）という内容が示されている	1点	「手入れをする人がいなくなり」等
④ 林が茂って（茂り放題になって）暗くなったという内容が示されている	2点	「暗くなった」「日光が届かなくなった」等
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

3　問4（4点）

ウ

第2段落に、里山とは「集落のまわりにあり、人々が薪をとったり、落ち葉を集めて肥料にしたりしながら、長い間利用してきた雑木林や田畑、ため池などの一帯」とある。第4段落でも、「人の暮らしと自然は……たがいを支え合う関係にあった」と述べている。

・ア 里山は人が手を入れて保たれてきた
・イ 人が入らなくなると、林の中は暗くなった
・ウ 第2段落・第4段落の内容→正答
・エ 人々は定期的に木を切ってきた

採点ポイント: 「里山」の説明にあたる第2段落の定義を、根拠にできているか。

3　問5（5点）

エ

「適切でないもの」を選ぶ問題。

・ア: 第1段落の原生林と、第2段落以降の里山を比べ、自然によって守り方がちがうことを示している→適切
・イ: 第2段落で里山を説明し、第3段落でカタクリ、チョウ、ハチなどの例を挙げている→適切
・ウ: 第4段落は「つまり」で始まり、第2・3段落の内容をまとめている→適切
・エ: 筆者自身の里山での体験談は、本文に出てこない→不適切→正答

採点ポイント: 「本文にあること」と「本文にないこと」を区別できているか。

3　問6（5点）

ウ

最終段落で筆者は、「大切なのは、その自然が、どのような関わりの中で今の姿になったのかを知ること」「自然を守るとは、自然から手を引くことと同じではない。その自然にふさわしい関わり方を選ぶことなのだ」とまとめている。

・ア 第1段落で、里山のような自然ではそうとは限らないと述べている
・イ 人が入らなくなると、林は暗くなり生き物が減った
・ウ 最終段落の主張と、里山の例の内容を合わせた説明→正答
・エ 木が茂ると林が暗くなり、草花が育たなくなる

採点ポイント: 具体例（里山）と、最終段落の主張の両方を含む選択肢を選べているか。

4　問1（4点）

エ

「高き枝の実は、鳥のために残せ」は、「高い枝の実は、鳥のために残しておけ」の意味。そのあと「低き枝の実のみを取らせて」とあり、高い枝の実は取らずに残した。

・ア 弟子の願いだが、僧は「ことごとく」取ることを認めていない
・イ 鳥のために残すと言っており、鳥を来させない意図ではない
・ウ 「熟したり」と弟子が言っており、熟していないからではない
・エ 「鳥のために残せ」の意味→正答

採点ポイント: 「残せ」という命令と、「低き枝の実のみ」という行動を結びつけて読めているか。

4　問2（4点）

イ

②の直前に、「鳥ども、柿の木の上の実を食ひて」（鳥たちは、柿の木の上の実を食べて）とある。冬で食べ物が少ない時期にも、残された実があったので、鳥は畑を荒らさずにすんだ。

・ア 雪のために下りられなかったとは書かれていない
・イ 「柿の木の上の実を食ひて」とある→正答
・ウ 里の人が見張る場面はない
・エ 弟子たちがえさをやる場面はない

採点ポイント: ②の直前の「食ひて」の部分を根拠にできているか。

4　問3（4点）

(例) 鳥が畑を荒らさず里の人々の暮らしを守る

正答例:

・(例1) 鳥が畑を荒らさず里の人々の暮らしを守る（19字）
・(例2) 里の人の畑が荒らされるのを防ぐ（15字）

根拠: ③は、「先生が実を残されたのは、鳥のためだけではなく、里のためでもあったのだ」の意味。鳥が残された実を食べたので、畑が荒らされず、里の人々も助かった。「のみにあらず」は「だけではなく」の意味。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
① 里（里の人々・畑）のためになるという内容	2点	「里の人」「畑」等
② 鳥が畑を荒らさない（荒らされるのを防ぐ）という内容	1点	「荒らさず」「防ぐ」等
③ 10〜20字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

4　問4（4点）

ア

「ことごとく取りつくさんとすれば、かへりて禍ひを招く」は、「すべてを取りつくそうとすれば、かえってわざわいを招く」の意味。「少しを残すは、のちのためなり」は、「少しを残しておくのは、のちのためである」の意味。

・ア 取りつくさず、残しておくことの大切さ→正答
・イ 本文の教えと反対
・ウ 感謝される話は出てこない
・エ 取る順序についての話ではない

採点ポイント: 「ことごとく取りつくさんとすれば」の「ん（む）…ば」を「〜しようとすれば」と読み、「少しを残す」ことの大切さを読み取れているか。